

ごっこ遊び遊具～まち遊びキット～の導入による社会的相互作用の評価

佐藤朝美（東京大学大学院情報学環）
星野俊樹（ミサワホーム総合研究所）
星野裕之（ミサワホーム株式会社）
春日亀美智雄（春日亀意匠）
山内祐平（東京大学大学院情報学環）

1. まち遊びキットとは

社会性とは、乳児期から幼児期にかけて発達する重要なスキルとして研究が多く行われており、多用な定義がされている。本研究では、プロジェクト・スペクトラムにおける「社会的理解」の定義に着目しており[1]、社会的理解につながる社会的相互作用が生成する環境として、身近な街をテーマにごっこ遊びが行えるよう遊具を開発している。この「まち遊びキット」は、郵便局、駅、病院、パン屋の1.2メートル四方の建物と、郵便車、郵便バイク、電車、救急車の乗物(ともにダンボール素材)で構成される(図1, 2)。完成までには、千葉県N保育園(年長・年中・年少計25名を2グループ)に4日間(1回40分前後)導入し、形成的評価を行っている。観察した子どもたちの様子と保育士へのインタビューから改善点を洗い出し、まち遊びキットの修正と、小道具の見直し、保育士へ渡す「まち遊びキットの手引き」の作成を行った。

2. 本実験の実践と評価

開発したまち遊びキットが、社会的理解につながる社会的相互作用を生成する場として機能するか、下記の内容にて効果の検証を行う。

【場所】東京都目黒区K保育園(私立)

【日時】2～3月中の5日間, 10:00-10:30, 10:30-11:00

【対象】前半(年長6名, 年中7名, 年少8名)
後半(年長5名, 年中9名, 年少7名)

【手続き】事前に「まち遊びキットの手引き」を用い、保育士たちに説明を行った。また、保育士達には子どもたちの普段の様子を踏まえ、まち遊びキットでの役割を割り当ててもらった。導入の際、4つの建物と4台の乗物にボイスレコーダーを設置し、子どもたちと

保育士の発話を全てプロトコルとして書き起こした。また、キットの導入の他、同じメンバーにおける自由遊びの時間を観察とビデオ録画・ボイスレコーダーの録音を行い、プロトコルを起こしている。

【分析枠組】Sawyer(1997)は、ごっこ遊びで生じている子どもたちの即興的なやり取りについて、提案に対する応答(承認・拒否・拡張)、テーマに没入している度合いを示すフレームレベル、次の展開への影響の度合いを示す明示性という観点から分析を行っている[2]。ここでSawyerが着目している子どもたちの創発性は、本研究で狙いとしている社会的相互作用、つまり複雑なやり取りの中から、協同で創造的に遊びを作っていくプロセスを追うことに合致していると考える。

【評価】本研究では、同時多発的に生じている子どもたちのやり取りを、Sawyerの定義した枠組みを手がかりにプロトコル分析を行うことによって、まち遊びキットの効果を検証したいと考える。まず、自由遊びとごっこ遊びにおけるプロトコルの比較を行う。次に、初回と最終回のプロトコルの比較を行う。これらの比較から、まち遊びキットが社会的相互作用をより生成する様子を確認する。また、回を重ねる毎に創発性の変化についても分析していく予定である。

参考文献

- [1] Building on Children's Strengths: The Experience of Project Spectrum (Project Zero Frameworks for Early Childhood Education, Vol 1), Teachers College Pr, 1998
- [2] Sawyer, R. Keith. (1997) Pretend Play as Improvisation: Conversation in the Preschool Classroom. Psychology Press.



図1：まち遊びキット（郵便局と郵便車・救急車とパン屋・駅と電車）